

『うつほ物語』にみる差几帳

著者	倉田 実
雑誌名	大妻女子大学紀要. 文系
巻	51
ページ	15-25
発行年	2019-03-20
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006711/

『うつほ物語』にみる差几帳

【キーワード】 移動、俊蔭女・仲忠・犬宮・三条京極邸

はじめに

『うつほ物語』には、差几帳という語の使用はないものの、「御几帳さす」という形でそれと分かる場面が数多く見られる。差几帳については、『日本国語大辞典 第二版』に、「昔、貴婦人が外出の時、顔を隠すため左右の従者に几帳をささげ持たせたこと。また、その几帳。歩障（ほしょう）」とされている。しかし、子どもにもされ、外出時ではなく邸内での移動や牛車などの乗降に際してもされている。また、前後の場合もある。さらに、従者ではなく、祖父・親・夫・兄弟・子などがする場合も認められる。こうした事例が『うつほ物語』にみられるのである。

『うつほ物語』の通行の注釈書、室城秀之校注『うつほ物語 全』（おうふう。以下『うつほ全』と略記）や中野幸一校注『うつほ物語』（新全集。同じく『新全集』と略記）では、当該部分に差几帳である旨の注記がされている。したがって、取り立てて問題にする必要はないかもしれないが、『源氏物語』には差几帳のことはないの、その

倉 田 実

実際例として貴重であり、改めて確認してみたい。几帳そのものについては、前稿^①で扱ったので参照願いたい。この小稿は、その補遺のものである。

なお、絵巻類では『年中行事絵巻』巻一「朝観行幸」に路上でそれらしき様子が描かれている。次頁に示したように、楽人たちの前で、布衣姿の二人が三尺几帳を捧げ持っている図である。この図柄に対して、「これを並べて見透かしを防ぐ庭上または路上の屏障具として、差几帳ともいふ」^②「これを前に立てて、臨時の楽屋とするためのもの」^③などと説明されている。この図柄では帷子が横手に懸けられていて、屏障の役割を果たしていない。行幸の行列はすでに法住寺南殿に入っているのに屏障の役割は終わっているのであろう。ここは見透かしよりも、楽人たちの場を確保するための差几帳かもしれない。いずれにしても、差几帳にはこうした役割もあることに注意しておきたい。

以下の本文引用は先の『新全集』により、表記などは私に換えた場合もある。

『うつほ物語』にみる差几帳



『年中行事絵巻』「朝覲行幸」
(大妻女子大学蔵)

一 差几帳される人と折

最初に『うつほ物語』で差几帳される人物を確認しておきたい。源正頼関係で、妻の大宮に絵指示(絵解)で二事例、長女の仁寿殿女御と所生の宮たちに一事例、九女の貴宮に一事例であり、あとは仲忠関係になる。母の俊蔭女(尚侍)に八事例、妻の女一宮に二事例、子の犬宮に四事例と、事情がやや不明の一事例(以下の⑫)で、主に六人の女性たちに対しての計十八事例となる。圧倒的に仲忠関係に使用されている。

これは、政治的な面では貴宮の入内・立后・皇子出産・皇子立坊と続く正頼の物語よりも、琴をめぐる文化的な面での仲忠の物語が物語後半にもなると比重が増していくことにかかわっている。また、この点とかわって、正頼関係の女性たちに比べて、仲忠関係の女性たちは移動する場合が多いことも関係している。仁寿殿女御や貴宮は、宮中と実家正頼邸の往返が主な移動になるのに対して、俊蔭女の場合などは、宮中(琴の披露)・正頼邸(女一宮の犬宮出産)・三条殿(本邸)・三条京極邸(琴伝授と披露)というように、複数の場所への移動が必然化されている。それに伴って差几帳される場面が語られることとなっている。このことが巻別の場面数とかわかることになる。

巻別では、借用の事例⑦を含めると、『新全集』の巻順で、第五「嵯峨の院」巻に絵指示で二場面、第十一「内侍のかみ」巻に三場面、第十三「蔵開・上」巻に一場面、第十六「国譲・上」巻に一場面、第十八「国譲・下」巻に一場面、第十九「楼の上・上」巻に二場面、最終の第二十「楼の上・下」巻に四場面の、計十四場面となる。複数の女性が同一場面に語られる場合があるので人物ごとの使用例と数は違っている。このうち「嵯峨の院」「国譲・上」「国譲・下」巻の四場面だけが正頼関係、残りの十場面が仲忠関係となっている。「楼の上・下」巻で六場面なのである。

差几帳される折としては、親子対面と出産立会の為の邸内移動、牛車や輦車の乗降、及び三条京極邸の樓の昇降などの折になっている。以上のことは論末に事例場面一覧を付したので参照されたい。

高貴な女性には差几帳されることが当然であつたことが知られるのに、これらの折でわざわざ物語は語るようになってゐる。外出場面通常に差几帳のことが語られるわけではないが、それにしても数は多い。『うつほ物語』の特性として、物事を丁寧な語ろうとする傾向が指摘されているように、差几帳のことも同じ事情があることにはなる。しかし、それなりの語る意図があることは予想されるので、以下、具体的な事例を追っていきたい。

二 邸内での差几帳

先に記したように、『うつほ物語』には邸内での移動に差几帳される事例が見られる。まず大宮の場合である。二例あり、共に絵指示部分なので「」で括った。

① 「君達、物聞こし召す。宮、東のおとどに渡りたまふ。御達、いと多かり。うなる四人、御几帳さしたり。方々より、皆、物参りたり。」〔嵯峨の院〕卷・三三三頁

② 「君達に、物参りたり。中のおとどより、東のおとどに移りたまふ。うなる二人、御几帳さしたり。御達二十人ばかり。これ、おとどの御婿の君達などに、節供参り、御酒参り、いみじくす。」

〔嵯峨の院〕卷・三五三頁

①は仁寿殿女御が貴宮の東宮入内を大宮に勧めるために正頼邸に退出した折である。「宮」が大宮で、居所の北の対から「東のおとど（東の対）」で休んでいる仁寿殿女御と対面するために移動する場面になる。簀子を通つての移動なので膝行ではなく歩行となろう。ここでは童女四人が大宮に差几帳している。

②は新年の拝賀のために訪れた男君達に饗応する場面で、地の文に

『うつほ物語』にみる差几帳

は「東のおとどに君達も参りたまへり」とあるのを受けているが、この絵指示で誰に差几帳しているかは示されていない。しかし、この後は正頼が大宮に賭弓の饗応を相談する場面になるので、絵指示は東の対に移動する大宮に差几帳していることになろう。『うつほ全』が「北の対から、寝殿を通じて、大宮が東の対にお移りになる」とする通りである。この②では差几帳する童女が二人になっているが、①と人数の違いはよく分らない。

①②とも邸内での移動であり、絵指示のためにわざわざ示したのであろう。これが当時の実際であつたとすると、例えば『源氏物語』「御法」巻で二条院東の対に退出した明石中宮が、紫上の休む西の対に移動した際にも、差几帳されていたことになる。

次の③も同じく邸内での移動の場合になる。

③ さて、御湯殿果てぬれば、女御の君、抱かまほしう思せど、父おとど添ひ居たまへれば、尚侍のおとど抱きたまひて、御几帳ささせて入りたまひて、宮の御方に臥せたまつりたまひつ。（蔵開・上）卷・三四七頁

女一宮所生の犬宮の御湯殿の儀の場面である。女一宮の母仁寿殿女御が孫を抱き取りたく思ったが、新生児の父仲忠がいるので、俊蔭女（尚侍のおとど）が犬宮を抱いている。その移動の際に差几帳されている。湯殿がどこにあるか分らないが、そこから「中のおとど」にしつらわれた女一宮の休む御帳台まで移動したことになる。新生児に差几帳する例は見つからないので、ここは俊蔭女に對してされている。『うつほ全』は「尚侍の姿を隠すためのさし几帳」としている。

出産の折には、男性官人たちも多く奉仕するので、差几帳で隠すのであろう。こうしたケースも他にあつたと思われる。『源氏物語』「若菜上」巻の明石女御の出産の折、産所となつた北の町から、産養をするために春の町に渡る際に紫上が新生児を抱いて移動している。この場合も差几帳があつたのであろう。しかし、『源氏物語』はそのことをわざわざ語ることではない。

以上、邸内での移動で差几帳された事例となる。

三 帰邸しての下車の場合

宮中から帰邸して下車する際に差几帳される事例が、貴宮と仁寿殿女御に認められる。次節で扱う「内侍のかみ」巻のほうが、巻順としては前になるが、ここまでが正頼関係になるので先に見ておきたい。

④ 御車、御前乗り続きで、源中納言殿の住みたまひし西の一の対の南の端に御車寄せて、左大弁の君、宰相中将の君と、御几帳さして、おとど、左衛門督の君、御車の簾引き上げて、下ろしたてまつりたまふ。異君たちは、御車のもとに立ちたまへり。〔国議・上〕巻・三八頁)

⑤ 御車寄せて、御几帳さして、「はや下りさせたまへ」と聞こえたまへば、おとど、左衛門督と立ちたまへば、女御の君、「あな見苦しや。ここには、恥ぢたてまつらず。物恥ぢしたまふ人、ここにものしたまふめり」。大将、「宮たちもおはしまさぬをとて候ふなり。仲忠をば、な疎ませたまひそ。火を暗うなさむ」とて、御前松も暗うなさせたまへば、さるやうこそはあらめとて、まつ下りたまひて、宮たち下ろしたてまつりたまふ。おとど、左衛門督、御几帳さして入りたまへば、大将後に立ち入りたまへば、やがて御座所へも入れたてまつりたまはず、一の宮の御方におはしませて、御帳の内に入れたてまつりつ。〔国議・下〕巻・三六七～八頁)

④は、貴宮の場合で、伯父となる太政大臣季明逝去の服喪と、懷妊のため、やっと東宮に許されて宮中を退出し、帰邸した折である。宮中退出も帰邸も儀式になるが、後者のほうがより家族的な関係が明確になるということであろう。宮中退出時は特に語りは無い。貴宮の乗った牛車は源中納言涼が以前に住んでいた東南の町の「西の一の対の南の端」に、牛をはずしてから着けられている。この対が貴宮の御座所

になるからである。貴宮下車に際しては、宮中から供奉してきた上達部になる兄弟たちの奉仕のさまが語られている。次男の左大弁の君(師澄)と、三男の宰相中将の君(祐澄)が差几帳し、父正頼と長男の左衛門督(忠澄)が牛車の簾を上げて降りる介助をしている。他の兄弟たちは車近くに立ち控えている。正頼一族の将来は貴宮にかかっているのだから、家族総出の出迎えということになる。車は南簀子に着けられたので、すぐに室内に膝行できるが、それでも差几帳されている。帰邸の儀式のありようであり、兄弟たちや家人たちの視線を遮ろうとするのであろう。

⑤は女一宮の第二子出産に立会うために仁寿殿女御が所生の女二宮などと同車して宮中から帰邸した段である。車は寝殿中央の御階に着けられていよう。寝殿に仁寿殿女御の御座所があるからである。『うつほ全』は「寝殿の車寄せの所」とし、『新全集』も同じ口語訳をしているが、寝殿に「車寄せ」という施設はない。

到着すると仲忠が自ら差几帳して下車を促すと、仁寿殿女御は同車している女二宮が恥ずかしがっているらしいと告げている。仲忠は、男宮たちは宮中に残っているため自分が奉仕しているので嫌わないでほしいと言って松明の火を暗くさせる配慮をしている。仲忠の言葉に何か訳があるのだろうと思った仁寿殿女御は、先に自分が降りてから女二宮を降ろしている。

この度は④の時とは違って父の正頼自身と長男の左衛門督も差几帳したので、「大将後に立ち入りたまへば、やがて御座所へも入れ奉りたまはず、一の宮の御方におはしませて」という次第になっている。この箇所は、仲忠が仁寿殿女御の背後に従っていると解釈されているが、それでは「おはしませて」の主語が分からなくなる。ここは、仲忠の後ろに付いて建物に入られたので、そのまま寝殿の御座所ではなく、女一宮のいる東の対に導いたということであろう。「大将の後に立ち入り」の「の」の脱落と考えるとおきたい。背後にいて導いたとするのでは、おかしいことになる。この仲忠の導きには意味があった。

この頃は未婚の女二宮を奪いとうとする五宮と、宰相中将や蔵人少将（五男近澄）が色々と画策していた。五宮は宮中にとどめられたが、先着して邸内を見回っておいいた仲忠は、寝殿にいた不審な様子の二人を認めていた。宰相中将は女二宮を奪って逃走するための馬まで用意していた。そこで機転を利かして仲忠は、仁寿殿女御や女二宮を寝殿に入れずに東の対まで導いていた。そのことを語るために差几帳のことが語られたのである。

差几帳はドラマの演出に役買っているのである。また、父親の左大臣が、娘の仁寿殿女御に差几帳していることに注意しておきたい。

四 俊蔭女参内の場合

「天女」と思う母に対して、仲忠の場合は、滑稽なほどドラマチックに差几帳することが語られている。母を大切に思うゆえである。

相撲の節会を盛大にしたいと思う朱雀帝は、仲忠に琴を弾くようにさせたが、なかなか承引しなかった。そこで碁の勝負に弾琴を賭けたところ帝の勝ちとなった。仲忠は自分が弾くことをせずに母にさせようと思い、急遽欺いて参内させることになる。次の用例は、仲忠が三条殿で母を牛車に乗せ、内裏朔平門（縫殿の陣）に到着した次第である。

⑥ 仲忠、これ（母）を見るままに、藤壺を思ひ出でて、この北の方を、さらに親と思ひ忘れて、いづくなりし天女ぞと思ひ居たり。北の方、「さらば、車寄せさせたまへ」。中将、「ただ今おとどの見たまはぬこそ、いと口惜しけれ」とて、「御車寄せよ」とて、手づから御几帳さして、後に大人二人、副車に次々人乗りて、出で立ちたまふ。中将、移しに乗りて、車の轆近く添ひて立つ。この殿の饗の設けしに参れる四位、五位、六位など合はせて八十人ばかりして参りたまふ。

かくて、縫殿の陣に車引き立てて、中将、「しばし」とて、内

『うつほ物語』にみる差几帳

へ参る。御前駆の人、内に参る。「人々は、御車のもとに候ひたまへ。仲忠は、一人参りなむ」とて入る。（「内侍のかみ」巻・二三七八頁）

仲忠は母に事情を説明せずに牛車に乗せている。その際に仲忠は「手づから御几帳さして」介助している。ここを『新全集』は「童女などに持たせるのが普通なので、「手づから」と断った」としているが、外出の場合は「童女などに持たせるのが普通」とは言えないであろう。ここは母を大切に思うがゆえに、自ら差几帳したのだと思われる。

朔平門に到着すると、ここが参内した女性が下車する場所になるので、仲忠は、母をひとまずここに待たせている。そして、朱雀帝のいる仁寿殿で到着したことを告げてから、梨壺に向かっていく。そこに、東宮に入内した異母妹の母、嵯峨院女三宮が住んでいたからである。ここで仲忠は几帳を借りようとしている。挨拶を交わす部分は割愛して引用する。

⑦ そこ（梨壺）に中将参りて、「いかで人々にも取り申さむ」と、御簾のもとにて言ふ。皇女（女三宮）、「誰ぞや」と、口づからのたまふ。「仲忠」と聞こえて、「いかで、人だまひならむ御几帳賜はらむ。にはかに里へ取りに遣はすがなむ。宮、「いと汚けなりともやは」とて、（略）

その御局より、花文綾の帷子懸けたる三尺の几帳二具賜はりて、母北の方の御もとへ持て行く。（「内侍のかみ」巻・二三九〜四〇頁）

仲忠が女三宮から借りようとした理由について、『新全集』は右の「人だまひならむ御几帳賜はらむ」の注で次のように説明している。

人に貸し与える几帳、の意か。仲忠の訪問の目的は、この几帳を借りることである。仲忠がわざわざ梨壺から調達しているのが、俊蔭の娘用の差し几帳と思われる。牛車に乗るときに用いた几帳も持参しているようが、邸外の人目を考慮して、より上等な品を必

要としたか。

この説明はやや曖昧である。「邸外の人目を考慮」は宮中の人目とすべきで、几帳の数に注意されていない。仲忠が借りたのは、「花文綾の帷子懸けたる三尺の几帳二具」であった。「花文綾の帷子」は美麗几帳なので「上等な品」になる。これは「三尺の几帳」なので、差几帳のためとするのは間違いない。「二具」は、四本になる。几帳は一对で使用されるので一具とされる。仲忠は三条殿で母を乗車させる際に自ら差几帳していたので、これも一具として持参していたことになる。几帳は母のために六本用意されたのである。この理由は、次の朔平門から仁寿殿に到る経過ではっきりする。

⑧ 仲忠、仲澄の君を、「いざたまへ。仲忠、せちなる人、今宵参らするを、御陰に隠して率て入りたまへ」。仲澄、「誰ぞや」。「いさかし」とて率て、さて、㉑やむごとなくむつましき人に几帳持たせて、父おとどの御沓持たせて、「はや下りたまへ」と言ふ。

「物思はずも思ほゆるかな。いづくに下りよとてぞ」。中将、「あなさがな。な知ろし召しそ。さりとて、悪しき所にはおはし

まさせてむや」。北の方、「あな苦し。異様な参りかな。さる心も思はぬものを。かたはなる目をも見るかな」とのたまへど、昔より中将の言に従ひたまへば下りたまふ。①童四人、御几帳を前

にさしたり。大人後に立ちて、中将、沓覆かせ奉り、裳取らせて、御髪つくりひ、かしづきたてるさま、めでたきこと限りなし。い

とうつくしげなり。めでたくつくりひて、㉒我も異君達も、几帳

さして参らせたまつる。(内侍のかみ) 卷・二四一―二頁)

仲忠は仲澄に参内の介助を頼んで同道するようにしている。㉑「やむごとなくむつましき人に几帳持たせて」の「人」は仲澄になり、持たせた几帳は、嵯峨院女三宮から借りたものになるのは間違いない。四本借りたので二本持たせたのであろう。自身も二本持ったことになる。この後にある「父おとどの御沓持たせ」た人は、従者であらう。

こうして朔平門に戻っている。

仲忠に促されて朔平門で下車した母には、①「童四人、御几帳を前にさしたり」とされている。この四人の童に借用した三尺几帳二具を持たせたことになる。母の左右ではなく前で差几帳させるのである。借りた「二具」は多分お揃いであつたはずで、童四人にふさわしい。母の背後には大人の女房を立たせ、仲忠が沓を履かせてから、裳の裾を取らせ、髪を繕っている。かいがいい仲忠のお世話ぶりである。そして、移動する際には、㉒「我も異君達も、几帳さして」とあるように、仲忠と仲澄も差几帳をしている。『新全集』は「仲忠と仲澄は側面から几帳を差すか」としており、その通りであらう。そして、指摘はないが、この二本が三条殿から持参したものになる。

引用した⑥⑦⑧、いずれも差几帳にかかわる一連の用例であつた。こうした語りはなくても、この後の朱雀帝を前にした俊蔭女の彈奏に何ら差し支えはない。しかし、丁寧な差几帳して参内する様子が語られている。俊蔭女の移動には、なるべく差几帳を語るべきとでもいうようなことがあつたのかも知れない。それによって、隠される俊蔭女的美貌を暗示させ、仲忠の孝行ぶりを語ろうとしたことになる。これが際立つのが「楼の上・上下」巻になる。

五 三条京極邸移御

仲忠の再建した三条京極邸が完成し、いよいよ移御の折になっている。仲忠は移御の儀式を盛大にしようとして、豪華な牛車二両を新調し、前驅の者たちの衣装に気を配り、行列の次第にも指示を与えている。後の展開からすると、これは新宅移徙の儀礼ではないようで、すでにそれは終わっている感じである。新宅移徙であれば、陰陽師の反問があつて西門から黄牛・水火童女・家長という順で南庭に入り、寢殿に上がつて五菓を食すというように、その儀式次第は定例化していた。したがって、一行がスムーズに邸内に入ることなど許されない。新宅移徙ではなく、移御ということで華やかさが演出できることにな

る。ただし、三条京極邸では「三日の饗」（四九一頁）がされているので、新宅移徙の儀礼に準じる次第はあるのであろう。

さて、次の引用は、八月十三日に、女一宮と俊蔭女がそれぞれ三条京極邸へと出立する段である。以下、俊蔭女の呼称を「尚侍」にしていきたい。「内侍のかみ」巻での琴の演奏に満足した朱雀帝は、俊蔭女を尚侍にしていた。

⑨ 時なりて、殿に御車寄せさせたまふ。宮の乗りたまふ御几帳、左の大殿・大将とさしたまへり。乗りたまひぬるすなはち、大将、三条殿に馬を打ちておはして、南の廂に出て居たまへるを、「はや、はや」とて乗せたまふ。几帳も、殿二所してさしたまへり。（楼の上・上」巻・四八七～八頁）

移御の行列の盛大さは、すでに指摘されているように、「国譲・下」巻で語られた藤壺腹皇子の立坊が決定して正頼たちが参内する行列と対照されている。しかし、対照化されていない一つに、出立と到着の際に行われる差几帳の様子である。右では、別々に出立する女一宮と尚侍に差几帳された様子が語られている。時刻は午後六時頃になっている。移徙は夜にされる儀式なので、時刻もそれに準じていよう。

女一宮は正頼邸の三条院東の対に住んでいるので、寝殿に移動しているのであらう。その寝殿に車を寄せさせている。御階に牛車を寄せたのである。そして、女一宮の乗車には、祖父となる左大臣正頼と嫡の右大将仲忠が差几帳している。祖父がするのは異例であらう。

乗車が終わると仲忠は馬を駆らせて三条殿に急行している。母、尚侍の出立に立会うためである。尚侍はすでに南の廂に待機していたので、女一宮の車に遅れないように急いで乗車させている。その際に「殿二所」、すなわち夫兼雅と息子仲忠が、差几帳している。

こうした差几帳は、奉仕する人と、奉仕される人の素晴らしさを語るものとなっている。三条殿での光景を目撃した嵯峨院女三宮は、「子のかうもてかしづきたまふは、いみじきものかな」（四八八頁）との感慨を漏らしている。『うつほ物語』がなぜ差几帳にこだわるかの

理由が暗示されていると言えよう。仲忠の孝を語っているのである。差几帳のことは、三条京極邸に到着した際にも語られている。

⑩ おはし着きて、まづあるじ方にて、尚侍のおとどの御車、西の御門より入れて、西の対の南に寄するは、殿を二方しつらひたまへば、西の対におはす。

次に、宮の御車、東の対の南に寄す。それより殿に渡りたまひて、一の宮下りたまひて、四尺の裾濃の龍胆の御几帳さして下りたまひぬ。大宮の下りたまふには、同じ色の三尺の几帳さして出でたまふ。大将、「乳母、抱きて下りたまへ」とのたまふに、「否、宮の御やうに下りむ」とのたまひて、小さき御扇さし隠したまひて、静かにゐざりおはするさま、いとうつくしくゆゆしく覺えたまふ。（楼の上・上」巻・四九〇～一頁）

二つの車は、あらかじめ「西の御門より尚侍の殿、東の御門より宮の御車は入るべきなり」（四八六頁）と決められていたが、どちらの順から入ることは配慮されていなかったようである。そこで、「あるじ方」からということ、まず尚侍の車を西の御門から入れて、西の対に着けられている。三条京極邸の所有者は俊蔭女だからである。尚侍の下車の様子や差几帳のことは語られていないが、当然あったということなのであろう。

続いて、女一宮と大宮が同乗している車が東の御門から入って東の対に着けられている。このあたりの文章はやや錯綜しているが、それなりに理解できる。女一宮の下車では「四尺の裾濃の龍胆の御几帳さして」とされ、大宮には「同じ色の三尺の几帳さして」とされている。わざわざこの日のために同色の大小の几帳が用意されたのであろう。到着時にまず目につくのが、下車の際の差几帳ということになる。大宮は乳母に抱かれて下車するのを拒み、小さな扇で顔を隠し、静かに膝行して降りている。尚侍には語られなかった差几帳のことは、この親子のためにとっておいたのかもしれない。

移御の儀式は三日間続き、四日目の夕刻に女一宮は正頼邸に戻って

いる。五日目では兼雅と仲忠親子が庭を巡回する様子が語られて、「十七日なりし」で「楼の上・上」巻は終わっている。続く「楼の上・下」巻では、早速犬宮への琴の伝授が楼で開始されている。差几帳の事例も続くので、節を変えてさらに見ていきたい。

六 楼の昇降

最終巻の「楼の上・下」巻は、次のように始まっており、前巻から続く十八日のことと考えられている。移御から六日目になる。

⑪ かくて、つとめての御台、ここにて参らせたまひて、とばかりありて、楼へ二ところ渡したてまつりたまへり。尚侍の殿のも、いぬ宮の御方のも、⑫ 大人十二人、几帳さし続きたり。白銀の透き餌袋に、御菓物入れたり。

まつ尚侍の殿上りたまふ。階は、御手を取りて上せたまつりたまふ。着たまへる、唐綾の御衣一襲、紫苑色の夏の織物の桂、紅の三重襲の御袴。大将、白き綾の単衣、紅の打ち拾脱ぎ垂れたまへり。⑬ 几帳のさしはづれたるより、はつかに、几帳より、御様体、七尺余の御髪の瑩しかけたるやうなる、いみじうめでたう見ゆ。

中納言の君といふをば、「しばし候ひたまへ」とて、東の楼に、犬宮抱きたてまつりて、「⑭ 几帳を高う、女房させ」とのたまひて、これも、同じごと、⑮ 長々と、人歩み続きたり。御衣、縹色の小さき裳、綾の打ち拾一襲、尾花色の細長、御袴いと長し。

〔楼の上・下〕巻・五〇七〜八頁

寢殿での朝食を済ませてから、仲忠は母と子を楼に上がらせている。楼は、南池中島の東西に二つ建てられ、東が犬宮用、西が尚侍用となり、その間の空中に渡殿を渡して仲忠の居所とされていた。この登楼は儀式のようになされている。秘琴・秘曲の伝授が開始されるのを期しているからであろう。二人は、二つの楼に別々に昇っている。

尚侍に対して、⑯ 大人十二人、几帳さし続きたり」とあるのは、西の対から南池に渡した反橋を通って楼に到る際の、女房たちによる差几帳である。移御の際に訪れていた人々はすでに帰っていても邸内には使用人などがいるので隠すのであろう。

まず尚侍が登楼している。犬宮はそれまで待つのである。楼に昇る階段は、仲忠が尚侍の手をとって介助している。⑰ 几帳のさしはづれたるより、はつかに、几帳より、御様体、七尺余の御髪の瑩しかけたるやうなる、いみじうめでたう見ゆ」は、几帳が重複し、語りが前後しているが、差几帳されている様子である。しかし、これまでの隠す機能は後退し、姿が瞥見されるようになっていく。几帳が外れたり、几帳の間から尚侍が見られているのである。これまではなかった様相である。差几帳されても、美しさがいま見えるのである。このことは、後にも語られているので、そこで触れることにしたい。

犬宮の番になると、仲忠は自ら抱いて登楼しようとしている。その際に⑱ 几帳を高う、女房させ」と命じているのは、抱くことで犬宮の位置が高くなるからであろう。⑲ 長々と、人歩み続きたり」も、几帳の語はないものの差几帳の様子である。物語はこと細かに差几帳にこだわっていると言えよう。

登楼してから早速伝授が開始されている。夕方の食事も楼の上でされるようになっていく。これに関しても「几帳さして」の用例が認められる。しかし、この意味がわかりづらい。

⑳ 例の、夜さりの御台は、楼に参らす。（略）御台、下仕へ四人、取り続きて、裳・唐衣着て参る。上臈二人、前に三尺の几帳さして、楼に上りて、参らす。御賄ひは、例の、大将仕うまつりたまへば、「あな見苦し。中納言、侍従を」とのたまへば、「何か」とて、賄ひ賄ひ参りたまふ。（楼の上・下）巻・五一三〜四頁

ここの几帳に対して、『うつほ全』は「さし几帳は、通例、左右に几帳をさす。ここは、前にさした例である」とし、『新全集』は「さし几帳を前にさした例。通常は左右に几帳をさすが、階を昇るので前

にさしたのであらう」としている。『うつほ全』は頭注スペースの関係で簡略だが、『新全集』と同じ解であらう。しかし、女房が御台を持って登楼するのに、なぜ差几帳されるのが不明である。ここは、「上臈」一人、楼に上りて、前に三尺の几帳さして、参らす」ではなからうか。「前に」は尚侍の前にであり、食事のために几帳を置いて隠し、お膳を供したということではなからうか。「さして」は、ここでは置いた意が強いと思われ、差几帳というよりも、置いて隠すための几帳とならう。

物語は進み、伝授も終わって、尚侍と犬宮は楼を降りて、ようやく秘琴披露の折になっていく。物語は、まず降りたところから始まり、寢殿に着くまでの移動を長々と語っている。東西の反橋から寢殿への移動に際して、嵯峨院太后宮の輦車が尚侍に、朱雀院のが犬宮に供されるのが嵯峨院によって決められていた。そして、尚侍の車には右大臣兼雅、犬宮の車には左大臣正頼がそれぞれ介添えることになっていた。次は、寢殿に着くまでの様子であり、この移動に伴い、差几帳のことが何度も語られている。なお、本文の揺れがあつてその解釈に相違が見られるが、ここでも『新全集』によっていきたい。

⑬ 右大将、こなたかなたに、「はや、はや」とのたまはすれば、蘇枋の裾濃の持て出だして、絵描き、縫物したる、(1)几帳ども、三十人の大人取り続きで、童四人、綾の上の袴着たり。また、犬宮の御方の人に、紫の裾濃に縫物して、唐組を紐にしたる三十人、童の丈、これは少し劣りなる、長々とある反橋の上に(2)さし続きたる、いとをかし。

まづ、おとど、御具賜りて、下に、右のおとどに譲りきこえたまひて、犬宮下ろしたてまつりたまふ。右大将抱きたてまつりたまひて、(3)几帳の前に童、こなたにも、褥、火取、薰物に、白銀・黄金の壺二つ据ゑたる物、脇息と取りて歩みたり。丈整ひ、髪丈に一尺あまりたるが、かたちうつくしげなり。(4)隙なくさし続きたる几帳、色々の桂、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし。

『うつほ物語』にみる差几帳

近き車どもよりも遥かに見ゆる、いとめでたし。

(5)左のおとど、几帳に添ひて、はつかに犬宮の様体を見たまふに、いみじくうつくしげにめでたう見えたまふこと、貴宮の稚児におはせしにこよなうまさりたまひて、貴になまめかしう、見驚くばかりいみじきものかな、こぼくの君たち、一、二の宮ばかりこそは、品まさりて見えたまひしかど、まだ小さきほどに、いとかうは見えたまはざりき。これは、ゆゆしく、変化の者と見えたまふ。

衆の声、御前の親王たちより始めて、弾き物、吹き物、声静かに、等しくて、面白きこと限りなし。嵯峨の院、御扇して、拍子打たせたまふ。一院、時々、唱歌したまふ。かかること、またあらじ、と見え聞こえたり。(「楼の上・下」巻・五八一―五三頁)

引用冒頭が分かりにくいのが、ここでの要点は、楼のある中島に渡された西の反橋に、(1)「几帳ども、三十人の大人取り続きて」いたことが確認できればいい。(2)「さし続きたる」も同様で、東の反橋になる。反橋を歩行することになるので、それぞれ三十人の女房が反橋の左右に十五人ずつ居並んで差几帳したのである。反橋は十五間なので、一間に一人ということになる。ただし、⑪に「大人十二人」とあった理由は分からない。この光景自体も見物なのであり、それが(4)「隙なくさし続きたる几帳、色々の桂、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし」になる。花やかな几帳、そこからはずれて見える女房たちの衣装がなまめかしく見えるのである。

引用二段落目、犬宮を楼から降ろす際にある、「まづ、おとど、御具賜りて、下に、右のおとどに譲りきこえたまひて、犬宮下ろし奉りたまふ。右大将抱き奉りたまひて」の、「御具賜りて」と「下に」が分かりづらい。「御具賜りて」は几帳をいただいの意で、ここは、楼の階段の上方に正頼、下方に右大臣兼雅が位置して前後で差几帳をし、その中を仲忠が犬宮を抱いて降りたということにならうか。(3)「几帳の前に童」以下は、「歩みたり」に続いているので反橋を渡って

いることであらう。

ここで興味深いのが、⑪の⑫にあったように、(4)「隙なくさし続きたる几帳、色々の桂、裳の裾どものはづれたる、いとなまめかし」や、(5)「左のおとど、几帳に添ひて、はつかに犬宮の様体を見たまふに、いみじくうつくしげにめでたう見えたまふ」とあることである。差几帳の隠す役割よりも、そこからかいま見えることが示されているのである。今まで人々に隠されていた犬宮の容姿が、差几帳の役割を後退させて、見られている。神秘であった犬宮の姿が、人々に知られ始めることになったと言える。かいま見られた犬宮は、正頼によって貴宮の稚児の折よりもすぐれており、「変化の者」とされている。新たな変化の者の一族の系譜が確認されたのである。

これは秘琴披露されることと見合っている。神秘であった秘琴演奏、神秘であった犬宮の容姿、それがここにきて神秘のベールが脱がされつつあることを暗示している。さらに尚侍も見られるようになっていく。次は⑬に続く箇所、輦車が寝殿に着いた所からになる。

⑭ 御車寄す。四位、五位の殿上人、階より下りて、手懸けて寄せたり。一院、「かの車、異の隅の高欄放ちて寄せさせよ」と、頭の中将にのたまはすれば、左、右大臣、前に立ちて歩きたまへり。右大将、いぬ宮の御車引きたまへり。右大将、右のおとど、(6) 几帳さし下ろしたてまつらむとするに、例の儀式あるをとて、御色賜はりたまひて、まづ尚侍のおとど下りたまひ、次に、犬宮の御輦車寄す。左のおとど手懸けたまへば、次々の人下りて寄せたり。

(7) 几帳、夕日の透き影より、尚侍、紅の黒むまで濃き唐綾の打ち拾一襲、三重の袴、龍胆の織物の桂、唐の穀、薄物重ねたる地摺りの裳、村濃の腰さして、唐の糸木綿、赤色の二藍重ねて、唐衣着たまへり。犬宮、唐撫子の唐綾の桂一襲、桔梗色の織物の細長、三重襲の御袴。

尚侍、ゐざり寄りて、下ろしたてまつりたまひて、御衣引き繕

ひなどしたまひて、ゐざり入りたまふ透き影、犬宮、玉虫の簾より透きたるやうに、「あなめでた」と見えたり。小さき扇さし隠したまひて、ゐざり入りたまふを、(8) 一院、几帳の綻びより御覧じて、いとうつくしと思す。尚侍、様体細やかに、なまめかしう、あな清らの人々と見えたり。ただ今二十余ばかりにて、裳の裾に溜りたる髪、艶々として、裾細からず、また、こちたからぬほどにて引き添へられて、ゐざり入りたまふを、(9) 左のおとど、几帳さしたまふまに見たまひて、いといみじかりける人かな。年のほど、大将の妹と言はむにぞよき。仁寿殿の女御には、様体、けはひもまさりたまへり。昔の心ならましかば、かかるを見過ごさましやと、ねたう覚えたまひ、からく思したり。(楼の上・下)

巻・五八三(五頁)

まず、(6)「几帳さして下ろし奉らむとする」は、兼雅と仲忠が差几帳して犬宮を輦車から降ろそうとしたことである。しかし、「例の儀式(作法)」があるとすると朱雀帝の指示で、祖母となる尚侍から下車させている。

(7)「几帳、夕日の透き影より」の「几帳」がわかりづらいが、『新全集』の「几帳の夕日の透き影で見ると」とする口語訳に従っておきたい。この几帳も差几帳であるが、隠すよりも、その透き影で人が見えるようになっていく。差几帳の機能はやはり変質していることになる。先に輦車から降りた尚侍は、犬宮を降ろして身だしなみを整え、共に膝行して寝殿に入っている。その二人の姿が、かいま見えるようになっていく。(8)「一院、几帳の綻びより御覧じて、「いとうつくし」と思す。尚侍、様体細やかに、なまめかしう、あな清らの人々と見えたり」がそれである。この几帳は綻びがあるので、御座とするために置かれていた四尺几帳になる。その綻びから朱雀帝は、犬宮と尚侍をかいま見できている。さらに、(9)「左のおとど、几帳さしたまふまに見たまひて」も同じように正頼が尚侍を見ることができている。差几帳しながら、正頼は尚侍の美しさを見て感動している。ここにきて、

差几帳はその機能を喪失したことになる。隠すのではなく、かいま見させるものとなっているのである。

おわりに

以上、『うつほ物語』にみえる差几帳の事例を検討してきた。この物語は同じような事柄や語り方を反復することがまあるが、差几帳についても同じ事情を指摘できるものである。②の邸内移動での差几帳は①の反復と見られよう。降車する際の⑤は④の反復となる。⑨はその内部での反復である。

また、物語が差几帳にこだわることは、「内侍のかみ」巻での⑥⑦⑧の一連の用法、三条京極邸移御にかかわっての出立⑨と到着⑩での語り、また、⑪と⑬⑭の楼の昇降での繰り返しに見られるところである。長編物語の展開に差几帳が有効なアイテムとしてあったことが知られるのである。

さらに、「楼の上・下」巻にもなると差几帳は、その機能を後退させるようになっていた。秘琴が披露されることと相俟って、弹奏する女性の姿も披露されるようになったと言えよう。『うつほ物語』は差几帳を有効に活用しているのであった。

注

- (1) 拙稿『源氏物語』の几帳』（『大妻女子大学紀要——文系——』47、二〇一五・三）
- (2) 鈴木敬三『住吉撰本 年中行事絵巻解説』（古典藝術刊行會、一九五九・八）
- (3) 小松茂美編『日本の絵巻8 年中行事絵巻』（中央公論社、一九八七・一一）
- (4) 三条京極邸については、拙著『庭園思想と平安文学』（花鳥社、二〇一八・一一）の第10章「音楽の庭——『うつほ物語』仲忠の三条京極邸——」で扱った。三条京極邸の概念図を載せたので参照されたい。

『うつほ物語』にみる差几帳

『うつほ物語』の差几帳の事例場面一覧

場面	No.	人物	差几帳する人	備考	巻
邸内の移動	①	大宮	女童四人	絵指示	5「嵯峨の院」巻
	②	大宮	女童二人	絵指示	
	③	俊蔭女	女房？		13「蔵開・上」巻
牛車	降車	④ 貴宮	師澄・祐澄		16「国譲・上」巻
	降車	⑤ 仁寿殿女御 宮たち	仲忠 正頼・忠澄	同車	18「国譲・下」巻
	乗車	⑥ 俊蔭女	仲忠		11「内侍の督」巻
	一	⑦ (俊蔭女)	一	借用の事例	
	一		仲忠・仲澄	運搬の事例	
	降車	⑧ 俊蔭女	女童四人 仲忠・仲澄	同時	
	乗車	⑨ 女一宮 俊蔭女	正頼・仲忠 兼雅・仲忠	犬宮もか	19「楼の上・上」巻
	降車	⑩ 女一宮 犬宮	女房？ 女房？		
	昇楼	⑪ 俊蔭女 犬宮	女房 女房	仲忠、垣間見	
	楼上	⑫ 俊蔭女	女房	置いた事例か	20「楼の上・下」巻
楼	降楼	⑬ 俊蔭女 犬宮	女房三十人 女房三十人	正頼、垣間見	
		犬宮	兼雅・仲忠	一院、垣間見	
	降車	⑭ 俊蔭女	正頼	正頼、垣間見	
輦車	降車				